

「故郷は変わったのか」－最終弁論①－

「変わらない」側の最終弁論

司会 では、これから変わらない側の最終弁論に入ります。時間は3分です。

これから、私たちの最終弁論を始めます。私たちは故郷は変わっていないと思います。でも、「わたし」とルントウが変わってしまったのは事実だと思います。しかし、ホンルとシュイシヨンは昔のルントウと「わたし」のように無邪気に遊んでいたのです。これは、やっぱり故郷は変わっていないのだけれど、「わたし」とルントウは身分や境遇のせいで、厚い壁によって引き裂かれて、このようになってしまったということだと思います。故郷は変わっていないのに、わずかな身分や境遇の違いによって変わってしまった自分たちの二の舞になることのないように「わたし」は、ホンルとシュイシヨンに自分の希望を託したのだと思います。

「わたし」とルントウもまるっきり変わってしまったわけではないと思います。「わたし」は昔のルントウの思い出を今まで大切にしておいて、かわいそうなルントウ、変わってしまったルントウのために何かしてあげたいという優しい無邪気な気持ちが残っていました。

ルントウは昔、兄弟のようだった仲のよい友達の引っ越しを朝早くから来て、自分の娘も連れて話をする暇もないほど一生懸命手伝ってくれたのです。自分のだんな様だから手伝ったという考えもできるのですが、もし、そんな義理の手伝いだったなら朝早くから来て一生懸命手伝いはしないと思います。最後の別れだから、少しでも「わたし」のことを手伝ってあげたい、近くにいてあげたい、ルントウの昔の友達への気持ちの表れだと思います。

それに、140ページの11行目に「わたしは相変わらずの偶像崇拜だな。」とルントウのことを言っているのですから、ルントウは昔と変わらず偶像的な物を価値のある宗教的対象として重んじ、崇めているのです。やはり、「わたし」やルントウがまるっきり変わったわけではないのです。

それと、立論で述べた根拠のように、昔と今の光景は変わっていないのです。そういうわけで、私たちは故郷は変わっていないと思います。これで、私たちの最終弁論を終わらせていただきます。ありがとうございました。

司会 ありがとうございました。時間は2分9秒でした。